

## ステージアップの予感

柏瀬光寿（柏瀬眼科）

予てより懸案であったアイキャンプでの超音波手術の導入。停電が起きやすい、費用が掛かる（従来の手術法の3～5倍）、それを行うのに適した手術用顕微鏡や超音波白内障手術器機をレンタルできる業者が見つからない、そして何より頭を悩ませたのがカウンターパートナーである Delek 病院の眼科助手 Tenzin Lungrick がアルコール漬けとなってしまう仕事のままならなくなっていた、というさまざまな問題が山積しており、長い間われわれは二の足を踏んでいた。しかし今回これらが一気に解決する方向に進んでいった。

まずは Dr. S. K. Sharma の登場だ。彼は中央政府直轄の施設である Eye mobile unit（アイキャンプを主に行っている施設）のチーフドクターで、Kangra 地区の眼科医療をも統括しているお偉いさんだ。毎年、恒例となっているアイキャンプの開催セレモニーには地域の警察のトップがやってテープカットをするのだが、今回は何と眼科医がやってきた。しかも私がダラムサラに関わって15年経つが、初めて見る顔だった。そんな彼から顕微鏡も白内障手術器械も貸すので、超音波手術をやってみないか！？とのプロポーズがあった。「甘い話しには棘がある」過去に何度も甘い言葉に誘われ、そしてたくさんの辛酸をなめた経験を持つ私にとって、このあまりにもおいしすぎる話しの裏で彼は何を画策しているのだろうという思いが脳裏を駆け巡った。しかし実際に Eye mobile unit へ行き、手術室を始めとする施設を見学するとともに事務長より説明を受け、彼らは信頼しうる方々で、これは次のステップに行くための階段に違いないと思えるようになっていった。さらに手術で使う眼内レンズやナイフ類を安く提供できる（政府がまとめて購入しているため、市販品より安価で卸せる）との話しも頂き、試算してみないと分からないが、費用面でも問題はクリアーしやすくなりそうだ。

つぎは、アル中からの快気だ！ 2000年に初めてアイキャンプを行

った際、声も小さく自信の欠片もなかった男 Tenzin Lungrick(テンジン ルングリ)。誠実で向上心はあったが、経験を積むステージと彼をサポートする人間が不足していた。そこに 2002 年、救世主メシアが現れた。そう私だ！1 年間の滞在期間中、昼は教科書を片手に勉強と外来での臨地実習を行い、夜はビールを片手に眼科学のイロハについて語り続けた。その結果、それまで眼鏡しか作れなかった彼はいっばしの眼科助手となり、一般外来の診察のみならず糖尿病や高血圧患者の眼底検査を内科医から依頼を受けるまでに成長していった。その要因を次のように考察する。私の拙い英語力を理解しようと彼の脳はフル回転し脳細胞が急激に増加、そこに新しい眼科の知識が乾いたスポンジが水を吸い取るが如くどんどん吸収されていたこと、そしてもともと彼が持ち備えていた勤勉さが相乗効果を示し、ここまでの成長に至ったのだと思う。しかし人間いつまでも高いモチベーションをキープすることは難しい。知人のチベット人は海外に移住して富を得る（そういう情報しか入ってこない）一方で、平穏なダラムサラでの漫然とした生活は彼をアルコールの世界へ引き込んで行った。前回は仕事中にラム酒を取り出し「Dr. mitsu、どう？」と差し出したり、朝から酒臭かったりし、病院スタッフや家族より「どうにか言って聞かせてほしい」と懇願されたが、どうにもならなかった。Delek 内で唯一眼科的知識を有する彼の協力なくして超音波手術の導入は不可能であることは自明だった。ゆえに残念ながら彼の更生も手術法の変更も半ば諦めていたが、今年の 5 月、突然彼から電話がかかってきた。「俺は酒を止めたぞ！」とのことだった。そう聞いても半信半疑であったが、実際にダラムサラへ行ってみてその言葉通りの彼をこの目で確かめることが出来、心より嬉しかった。なぜアルコールを断つことにしたのか理由は分からない。でもすっかりと立ち直っており、さらに以前にも増してやる気を見せていた彼を、Delek の Dawa 院長も看護師スタッフも、そして何より彼の家族が大歓迎していた。これにより超音波手術導入の話はますます前に進みやすくなった。

このように新技術導入に向けての駒が少しずつ揃い始めた。ただ未

だ越えなくてはいけない峠は幾つかあるとは思いますが、その道は決して高く険しいものではなく越えることは容易いだろう。そしてその向こうには、美しい風景が待っているに違いない。

今回のアイキャンプで、初めて視能訓練士（ORT）である林田くんが参加した。ダラムサラのアイキャンプにおいて過去に視力検査をやったことはなく初の試みであったが、Thupten（トゥプテン）というチベット語、ヒンズー語、日本語、英語、ハングル語を自在に扱う Super チベット人にサポートしてもらいながら、チベット人には超片言のチベット語で、インド人にはまさに片言のヒンズー語で説明（？）しながら検査を進めており、その姿はとても逞しくそして眩しかった。帰国後に「あの時、こうやれば良かったのに出来なかった。今度はこうやりたい！」と反省と改善策を口にしてている彼女を見て、とても頼もしく感じられた。きっと彼女をパイオニアとし今後参加するであろう ORT の存在が、このアイキャンプを次のステージに上がらせてくれることだろう。

今回も素晴らしきメンバーと素敵な時間を過ごすことが出来た。事前準備から綿密に計画を立て、そしてメンバーひとり一人に気を配り、全国からの寄せ集め集団を上手くまとめてくれた浅野隊長。アイキャンプで白内障手術をやるために、この1年間どれだけ努力を重ねてきたのだろうと手術技術にも心の置き場にも大いに磨きを掛けていた荒木先生。以前の参加時よりドッシリと腰を据え、手術では見事に完投した田寺先生。初参加の小川看護師に時には先輩としてアドバイスをし、ときには同僚として一緒に悩み、昼はオペ室で夜は宿の部屋でと四六時中どうしたら上手く手術が回るのかを考えそして実行してくれた塩入看護師。初参加にも関わらず落ち着いて二人三脚で奮闘してくれた小川看護師。そして豊富な経験と語学力さらには行動力を兼ね備え、この人なくては無事に我々のミッションは遂行できなかつたらしく感謝してもしきれない田宮さん。そして ORT の林田くん。前回のメンバーは最強だと思っていたが、今回のメンバーは本当に最高だった。この素晴らしい面々と一緒に考え、

そして一緒に行動できたことはこの上ない幸せである。この場を借りてお礼を申し上げたい。有難うございました。大好きです。

日本から持ち込もうとした手術用顕微鏡がデリー空港で通関できずに、大変な思いをした 2000 年の第 1 回目のアイキャンプから数えて今回で 15 回目となった。その間、患者さんのためにと 100 名を超えるメンバーがインドの辺境まで行き、皆がそれぞれ出来ることを積極的にやって一つ一つ問題を解決してきた。その結果、現地チベット人やインド人から絶大なる信頼を得てここまで続けてこられた。今後さらに我々のアイキャンプがステップアップし、一人でも多くの患者さんが笑顔になるよう絶え間ない努力と苦勞を続けていかななくてはならないと思う。

そして私達を支えてくださるたくさんのサポーターの方々の思いを胸に、天が私に与えてくださった「天命」を全力で全うしていきます。有難うございました。Toche-nang!